

## 日本特別ニーズ教育学会 2022 年度中間集会開催報告

2022年6月5日（日）に「日本特別ニーズ教育学会 2022 年度中間集会」を開催いたしました。今年度の中間集会は当初、山梨県での対面開催を計画しておりましたが、新型コロナウイルス感染症対策の観点からオンラインでの実施に変更しての開催となりました。

本中間集会では130名を超えるお申し込みがあり、午前中に研究委員会による「若手チャレンジ研究会」、午後には準備委員会による「基調講演・パネルディスカッション」を行い、盛会に終えることができました。申込者の半数近くは学部生・大学院生等の参加であったことも特徴的でした。

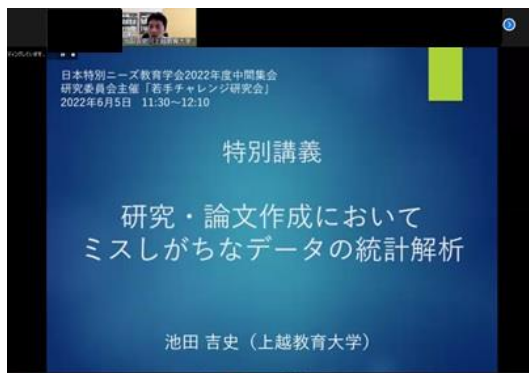
### 1. 「若手チャレンジ研究会」（研究委員会企画）

2018年度以降、研究委員会企画として開催しており、本学会中間集会および研究大会での中心的な柱である若手チャレンジ研究会を本中間集会でも実施いたしました。前半は、理事・研究委員長の高橋智会員（日本大学）による司会進行で「学部・大学院生、現職教師等による研究デザイン・実践研究発表」が行われました。発表者は学部4年生3名・大学院修士課程（博士前期課程）2名・大学院博士課程1名の計6名であり、ひろく特別ニーズ教育に関わる研究題目や当事者性を意識した内容が報告されました（各発表の題目等は学会ウェブサイト・中間集会案内をご覧ください）。それぞれの発表に対して、理事を中心としたコメンテーター3名からのコメントを中心に、今後の研究の発展に向けて非常に活発な意見のやり取りが行われました。

後半には、理事の池田吉史会員（上越教育大学）による特別講義「研究・論文作成においてミスしがちなデータの統計解析」が行われました。学生や若手研究者に向けて、教育学分野における研究方法の概要のほか、質問紙調査や介入研究で用いられる統計解析の際に陥りがちなミスや注意点が解説され、正しい統計解析のもとでよりよい研究を行っていくための講義をいただきました。

開催後のアンケートでは、「様々な観点からコメントをいただくことができ、研究への志向が深まった」といった発表者からの感想のほか、学部生・大学院生にとっては「研究対象は異なるが、大変良い刺激を受けた」、「自分と同じ学生の卒業論文デザインが聞けてよい機会だった」、「統計のお話が具体的でわかりやすく、学びが深められた」等の感想がありました。

本中間集会の若手チャレンジ研究会発表者募集では、発表定員を超えた応募があるなど、そのニーズは一層高まっております。若い世代が新しい研究課題に果敢に挑戦している現



状に学会をあげて応援してまいります。若手チャレンジ研究会は10月に開催される第28回研究大会でも継続予定です。

## 2. 基調講演・パネルディスカッション（準備委員会）

### 「With/After コロナの時代における特別ニーズ教育の公共的役割を問う」

本企画は、新型コロナウイルスの感染拡大によって経済格差・教育格差が一層深刻化している状況の中で、あらためて「教育の公共性」とは何か、とりわけ特別ニーズ教育の公共的役割について議論したいと考え、企画したものです。

基調講演・パネルディスカッションでは、教育学の分野において「教育の公共性」論を先進的に牽引している藤田英典氏（都留文科大学長）、小学校の現場で障害のある子どもを含む多様な存在を前提とした「学び合う教室文化づくり（公共空間づくり）」を実践してきた古屋和久氏（都留文科大学）、元中学校教員で子どもの貧困と学校文化の関係について探究している原田琢也会員（金城学院大学）にご登壇いただき、コメンテーターには理事・河合隆平会員（東京都立大学）をお願いいたしました。

基調講演・藤田氏からは「特別ニーズ教育の意義と課題」についてお話いただきました。特殊教育から特別支援教育・特別ニーズ教育の変遷、インクルーシブ教育にかかわる国内外の議論と現代の日本の学校が直面している課題等を取り上げ、教育の制度設計と実践の課題として、教育機会の「平等」理念の揺らぎと制度的格差化、教育の市場的価値の優勢化と実質的価値の軽視・歪み、「共生・包摂」基盤の脆弱化・分断化とケア機能の低下が指摘されました。

「名誉の等価性」を前提・基本とした教育実践が重要であり、制度的役割（日々の生活を枠づけ、活動を規定するもの）に付随して、個人の工夫により実践的役割や誠実と信頼のロジックが形成されていくべきであることを提示していただきました。

続くパネルディスカッション「With/After コロナの時代における特別ニーズ教育の公共的役割」にて、原田会員からは「政策と実践の横断の視点から」お話をいただきました。

コロナ禍の格差に注目し、特別ニーズ教育の現状として、特別支援学級・学校在籍児童生徒数増加の背景要因には構造的・社会的経済的・



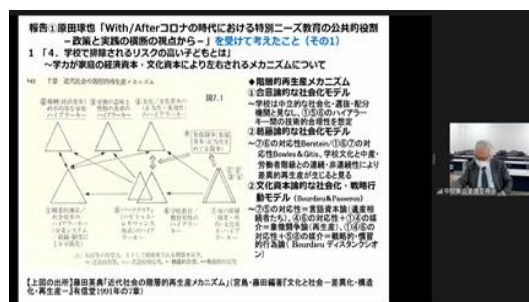
財政的要因が考えられることや、学校文化と子どもの差異とギャップによって特別な教育的ニーズ(課題)が生じていることがあげられました。特別ニーズ教育が公共的役割を果たすための課題として、通常学級の改革、差異を理解し受容し合うことができる人間関係づくり、学校外部の資源や機関との接続等を指摘されました。

古屋氏には、実践のご経験から『学び合う教室文化』づくりがめざすこと-教室のすべての子どもたちが『支え合い・高め合う』教室づくり』についてお話いただきました。多様な教育的ニーズを有する公立小学校において、「学びの共同体」の考え方に基づく「学び合う教室文化」の実践として、教室にいるすべての子どもたちが、同じ空間と時間を共有し、仲間と共に心を開き合い、学び合いながらさまざまな力を身につけていくための取り組みをご報告いただきました。



具体的な実践内容をもとに、すべての子どもが共に学べる教室づくりとして、①ビジョンを持つ、②実践の創造、③実践への心構え等のポイントが挙げられました。

藤田氏からは、原田会員と古屋氏のお話を受けて、学力が家庭の経済資本・文化資本により左右されるメカニズムや、構造的な再生産のメカニズムにより生じる特別な教育的ニーズを有する子どもへの対応等が課題として挙げられた。



コメントーターの河合氏から各話題提供者に対して、「旧来の障害の有無に焦点を当てた制度設計から、特別な教育的ニーズを生み出す障壁に焦点を当てた設計へ」(より直接的には「差異ある児童生徒が共に学ぶことを可能にする様々な手立ての試行とそれを可能にする資源の確保」というとき、制度はどのようにイメージできるかということや、障害のある場合を含めて「すべての子どもたち」に保障すべき学びの内容を、カリキュラムや教材として具体化し、実践できる教師(集団)の専門性や力量はいかにして形成されるのかについて質問が挙げられました。また、教育(実践)の「誠実と信頼」はいかにして獲得できるのか。特別なニーズのある子ども・青年の「人格の完成」に資する教育が「平和的な国家及び社会の形成」へとつながるといったイメージ・ロジックはいかにして社会的に共有可能かの検討が話題に出されました。

基調講演・パネルディスカッションの最後に、短い時間ではありましたが、参加者の声をチャットでひろいながらのフロア討議を行いました。その中で、教育の公共性を考えていくにあたって制度的役割と実践的役割の関係性をどのように考えていくかであったり、特別ニーズ教育を実践していくにあたって教員等の実践家はどのようなことを大切にすべきかといったことが問いとして出されました。こうした討議を経て、今後、本学会で特別ニーズ教育の公共的役割を考えていくにあたっては、藤田氏から今回提起された「名誉の等価性」

という概念と特別ニーズ教育との関係を問い、制度、実践の両面において取り組みを地道に進めていくことの必要性が確認されました。

クロージングセッションでは、加瀬進代表理事（東京学芸大学）より、本中間集会のまとめとして、「公共性が多様性にひらかれているとしたときに、ひらかれるべき多様性とは何か」を考えさせられる機会となり、課題研究での『特別教育ニーズとは何か』の検討へとつながっていくものであったことがあげられました。

開催後のアンケートでは、基調講演・パネルディスカッションや全体を通して、多くの感想をいただきました。一部を紹介いたします。

- \*本日の「特別ニーズ教育の公共的役割」はとても手堅い理論的検討であり、藤田先生の講演もあり、時機を捉えた研究集会でした。藤田先生から語られる再生産論、ボールズ・ギンタス、バーンステインなど、30年ほど前に一世を風靡しましたが、現在でも十分に検討に値する内容と拝聴しながら考えておりました。
- \*紆余曲折はありつつも特別ニーズ教育の公共的役割の原理は確実に広がっていると思いました。
- \*ミクロとマクロの視点を串刺した形でお話を聞くことができ、大変勉強になりました。
- \*セッションを通じて新しい考え方が自分の中に入ってきて、明日からまた頑張ろうと思えました。
- \*普段会わない先生方の意見を聞くことができてよかった。自分が教員になったときに心がけることを考えるきっかけになった。
- \*児童生徒の学びやすい環境を整備することが大切であると感じた。教室づくりやコロナ禍によって教育が厳しいといった問題などに目を背けず、向き合っていかなければならない問題なんだと改めて感じた。良い方向に進みつつあるように見えて、まだまだ問題点は山のようにあると実感した。
- \*障がいの有無、特別支援といった狭い枠組を超えて、学校教育と特別支援教育を架橋するアイデアがあるように受け止めました。また、公共的役割という観点にも、理論的アプローチと実践的アプローチがあり、それぞれの考えが示されると同時に、こちらも（質疑応答などを通して）架橋の試みがなされていたと思いました。

最後に、本中間集会にご参加の皆様、ご登壇の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。本年10月29・30日に開催の第28回研究大会へのご参加を心よりお待ちしております。

なお、本中間集会の取り組みについて、以下のように山梨日日新聞(2022年6月29日版)にて取り上げていただきました。



# 特別ニーズ教育 役割は

## 学会中間集会 都留文大・藤田学長が講演

日本特別ニーズ教育学会2022年度中間集会が開かれた。都留文科大の藤田英典学長が基調講演。特別ニーズ教育の公共的役割について意見を交換した。

教育学の分野から「教育の公共性」について研究してきた藤田学長は、不登校や暴力行為など学校が直面している課題を紹介し、海外の教育改革にも言及。国内では法改正などによって、病気や障害のある子どもが普通学校で分け隔てなく学ぶ「インクルーシブ教育」の法制的基盤は整ってきたと説明した上で、「好ましいものであれば、ど



オンライン方式で行われた日本特別ニーズ教育学会2022年度中間集会

んな活動・努力であっても等しく価値を持つという考え方が前提になることが、インクルーシブ教育で求められる」と実践面での課題も解説した。

講演後は元身延小教諭の古屋和久・都留文科大教授らが実践を報告。参加者が意見交換し、民主的な社会に向けて、特別ニーズ教育に求められていることを考えた。講演の前には、若手研究者による研究内容の発表もあった。

中間集会は5日、オンライン方式で開かれた。

〈清水悠希〉

2022年6月29日

日本特別ニーズ教育学会 2022年度中間集会準備委員会